名所物見の旅　其の六拾肆　奥日光の魅力　II

日光白根山頂上からの大展望。近くには尾瀬、越後三山、そして谷川岳など国境稜線。その向こうには妙高、黒姫、草津、奥志賀の山々。遠くには北アルプスまで望むことができた。

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

奥日光の魅力は前回紹介した湖沼や湿原、滝に集約されるが、それらを取り囲む山々も忘れてはならない。以前わたしは、日光の山は夏の林間学校の集団登山の対象ぐらいにしか思っていなかったが、実際に登ってみると案外歯ごたえのある変化に富んだ魅力的な山稜であることを知った。

ある年の暮れ、友人が正月に日光の山に登ろうと誘ってきた。内心（えー、日光・・・）と、なんとも返事のしようのない感じだったが、聞いてみると登山予定の日光白根山（奥白根山）は標高2，578メートルあり、日本アルプス以北の日本では一番高い山なのだという。なるほど地図を見れば一目瞭然、日本の屋根と呼ばれる日本アルプスの山脈は、その北端に位置する白馬岳（標高2，932メートル・北緯36度45分31秒）や雪倉岳（標高2，611メートル・北緯36度47分41秒）から徐々に高度を落として日本海に消えてゆく。雪倉岳から緯度にして14秒北に位置する北緯36度47分55秒の日光白根山は、関東以北の東北から北海道までの最高標高を誇っている。山高きが尊からずというが、やはりある程度の標高がないと登り甲斐がない。俄然興味を持ったわたしは、二つ返事で同行することを了解した。

日光に行く交通機関は車および電車利用ともに大変便利で、紅葉シーズン以外なら混雑もそれほどではない。白根山登山には大晦日まで働く友人の都合上、元日の東武電鉄の特急を利用することにしたが、JRに比べ早いうえに料金も安かった。

早朝浅草を立った電車は、1時間46分で東武日光に到着。そこからはバスに乗り換え、日光湯元温泉に向かう。バスがいろは坂上っていくと、かなりの雪が積もっている。中禅寺湖に出るとその向こうの日光連山は真っ白に雪化粧しており、これから冬山に登るんだといった緊張感が出て気が引き締まってきた。終点の湯元で下車すると、周りはみな温泉客ばかりで、登山姿はわれわれだけであった。

湯元にはローカル色が強い湯元スキー場があり、その脇から登り始める。スキー場上部までリフトを利用する手もあったが、冬山装備満載の大きなザックを背負ってリフトに乗るのはバランス上案外難しいので、ここは自分の足で登ることにした。上のレストハウスまで登って休憩をとり、家から持参のおにぎりと注文した温かい“けんちん汁うどん”で腹ごしらえを済ませ、12時30分日光白根山を目指し出発した。

歩き始めると、のっけからの急登に二人はすぐにあごを出した。遮るものがない山稜には強風が吹き荒れており、息をするのも苦しい。温度を測ると、気温はマイナス10℃。冬山では当たり前の温度だが、強風のせいで非常に寒く感じる。厳冬期用オーバーズボンをはき、登山靴にアイゼンを装着してピッケル片手にふたたび登り始める。二時間ほどで稜線が大きく開ける場所に出るが、ますます風は強くなる。凍え死ぬのではないかと思うような烈風に耐えながら進んでゆくと、天狗平という小広い平地にテントが一張りある。この強風の中での幕営は厳しいものがあるだろうにと、その労苦に敬意を表したい気持ちであった。

広い稜線をだらだらと登っていくと、やがて標高2,373メートルの前白根山に到着。正面に目指す日光白根山がその立派な山容を見せ、眼下に見える白根山直下の五色沼は完全に凍っている。沼畔にも三張りほどテントが見えるが、白根山などに囲まれているので、天狗平よりは風が弱いだろうし、幕営の条件は若干よさそうだ。男体山や中禅寺湖も見えるが、容赦なく吹き付けるこの烈風の中では風景を楽しむ余裕はなく、前白根の頂上はそのまま通過して下りにかかった。毛糸の目出し帽で覆っていても、耳が痛くてたまらない。ちぎれそうな痛みとは、まさにこういうことを言うのだろう。

午後4時12分、前白根山から下りきって小平地にでると、われわれが泊まる予定の避難小屋が現れた。今回ばかりは小屋を見て、本当に助かったという感謝の気持ちが湧いてきた。小屋に入って荷を置いて先客のグループに挨拶し、すぐさま雪を集める重要な仕事を明るいうちに済ますべく、また外に出た。冬山では水場は凍り付いているので、雪を溶かして水を作るのは欠かせない作業のひとつである。降ったばかりのきれいそうな雪を選んで大きなビニール袋に詰め、小屋に戻って大きなコッヘル（鍋）に雪を入れ、ガソリンコンロにかけた。本来なら雪は溶かして水にすればよいのだが、二人ともエネルギーを使い果たしていたので栄養補給すべく、まずは湯を沸かしてカップラーメンを食べることにする。胃袋を満たして人心地ついた後は、今夜と明日の水作りや寝床の確保に取りかかった。どうやら今夜同宿するのはわれわれの他には2パーティの7人だけのようで、小屋内のスペースにはかなりの余裕がある。明日の頂上アタックの装備などを整理し、後はのんびりと夕食の準備を始めた。

家から持ってきたおせちや夕食の携帯用食料を出して支度していると、友人はザックから一升サイズの紙パックに入った日本酒をおもむろに取り出して、「まずは一杯どうですか」と差し出した。こやつ、こんなものまで背負ってきたのか。なかなかのよい心がけに感心しながら、さっそくカップになみなみついでもらい一口啜った。（う～ん、ま、まずい。なんだこの酒は・・・）。いつも飲んでる日本酒とは雲泥の違いがある。友人の顔を見ると、「ダメだね、こりゃ。」と一言。わたしなどより数倍グルメで味にうるさい彼が、この酒をうまそうに飲むわけがない。「軽くて便利だと思ったけど、やっぱりこういう製品はそれなりですな。・・・ちょっと温めますか。」と、コッヘルに注いで加熱しはじめた。とりあえず温めてみると、変な癖も抜けて飲みやすくなり、きんとんやかまぼこを肴に正月気分を味わうことができた。

夕食を済ませて外に出てみると風は収まりつつあり、天空はものすごい星だ。ずっと眺めていたかったが、寒くてとても長くは居られない。ほろ酔いも一気に醒めてしまった。小屋に戻ってコンロに火をつけようとするが、ライターの火が点かない。手で握って暖め、ようやく着火した。温度を測ってみると、小屋の中でさえ氷点下7℃である。おそらく小屋の外は氷点下十数度に下がっているだろう。身体が冷えたのでもう少し飲みたいところだが、泥酔して凍死でもしたら洒落にならない。ぐっと我慢して寝袋に潜り込んだ。しかし冬山では熟睡などできるわけはなく、その夜は初夢を見るどころか、寒さで何度も目が覚めた。そしてどういうわけか、やはり寒さに震えた若き日の冬山登山のことが、懐かしく思い出されるのであった。

翌朝4時に起床して外に出ると、月が杲々と照っている。まだ夜明けの気配はないが、今日は雲ひとつない快晴のようだ。朝食の準備に取りかかろうとすると、水筒を寝袋の中に入れずに寝てしまったことに気が付いた。水筒の中の水は完全に凍ってしまっている。仕方ないのでふたを開けて、火にかけて溶かすことにする。冬山ではこういうこともあるので、水筒は金属製を携行することが鉄則である。急いで雑煮を作って平らげ、薄明るくなるのを待って出発した。気温氷点下14℃。快晴無風なので、寒さはちっとも感じない。昨日の烈風が嘘のようだ。白根山までの岩稜はカチカチになった雪で覆われていて、アイゼンがよく利き、ずんずん高度を稼いで登ることができる。6時50分過ぎ、頂上直下で突然オレンジ色の強烈な光が横から差してきた。われわれは雪の斜面の登行に集中していて、御来光を拝むことなどすっかり忘れていた。ピッケルを雪に突き刺し、太陽に手をあわせた後、ふたたび登りにかかる。そして出発から55分、絶好の天気に恵まれ、日光白根山の岩稜のピークに立った。

山頂から南西方向に日光男体山と中禅寺湖。右奥には筑波山とその背後には朝日に光る太平洋・鹿島灘が確認できる。

日光白根山は標高が高く、しかも周りに遮るものがないので、頂上からの眺めは素晴らしいの一語に尽きた。すぐ近くの温泉ヶ岳や男体山などの日光連山をはじめ、谷川岳、武尊山、越後三山、尾瀬の山々、那須連山、筑波山、赤城山とその後ろに秩父連山、そしてまたその奥に富士山、続いて奥秩父、南アルプス、八ヶ岳、浅間山、北アルプス、妙高、そして志賀の山々といった360度の大展望が広がっている。ひとつひとつ山を確認して展望を堪能した後、山頂にある奥白根神社の祠にお参りして今日の素晴らしい登山日和を感謝し、また下山の無事を祈って帰途についた。今宵は湯元温泉に宿を取ってあるので急ぐ必要もなく、われわれはのんびりと麓に向かって下っていった。温泉でゆっくりするのは今回の山旅のもうひとつの楽しみであり、湯元の硫黄泉に浸るのも久しぶりのことだった。

絶好の好天に恵まれ登頂を果たし、下山途中の前白根山から振り返って望んだ日光白根山（奥白根山・2,578メートル）。右下の雪の平地が完全に凍結した五色沼。前白根山一帯は連日の強風のため、雪が吹き飛ばされて岩肌が露出している。